岡山県立博物館だより

9号
3月1日
1977

「見せる人」の立場

館長　安藤和昌

51年4月に館長に就任して間もなく新聞記者のインタビューを受けたが，その記事に「見る人から見せる人になった」という表現があった。昨年話題になったCM論争をもじって、私の意向をこの言葉で表現した記者のセンスに感心しながらも、以後「見せる人」という使命感を心の中であたためてきた。だが約1か年経過した現在、この「見せる人」という立場は決して気楽なものでなく、「見る人」に比較して随分骨の折れる仕事であることを痛感している。

博物館法の対象となる施設は、人文科学分野・自然科学分野・この両分野の総合的施設と色々あるが，岡山県立博物館は「吉備文化の伝統を次代に伝えることのできる歴史博物館」を基本方針としている。「展示資料は考古・美術・文書・民俗・備前焼・刀剣の各分野にわたり、それらを通して本県の歴史の流れが容易に理解できることを目標」とすることが、建設の趣旨にうたわれている。「岡山県の歴史と文化」という統一テーマによる毎年の平常展でも、雑然と旧時代の品物を骨董屋的に並べたり、百科事典的に羅列したのでは、「歴史の流れ」が理解できない。あくまでも各分野で「歴史」の理解に役立つように、学芸員は資料の収集と展示構成に奮闘している。

平常展のほかに毎年秋には特別展示を行っている。51年度は「近代科学をひらいた人々――岡山の洋学者」をテーマとした。具体的には、地理学の先覚者「古川古松軒」、宇田川家・箕作家を核とした「備作洋学者の群像」、優れた蘭方医であり適塾で多くの人材を教育した「緒方洪庵」を三本柱にして構成した。多くの人々のご協力をいただき、広範囲に資料を採訪し、展示にあたっては、学問的に正確で、しかも平易な解説を付けるように努力した。各種の困難を克服し、創意工夫を加えて、18世紀後半から19世紀中頃にかけての岡山県出身者のすぐれた洋学上の業績を実物資料で示し、それによって当時の日本歴史の一側面を明るい脚光の中に浮びあがらすことができたのである。県民にとっては誇るべき先人に関する認識が一段と深まったわけであり、入館者の中の多数を占める県外者に対しても、岡山県文化の先進性を強く印象づけたと思うのである。たまたま、52年1月からNHKテレビ大河ドラマとして「花神」が始まり、村田蔵六（のちの大村益次郎）の適塾における勉学などについても、特別展であらかじめ勉強していたため、非常に良く理解できたとの感想を話された人もある。

ともあれ、入館者には最大の満足感を持ってもらい、楽しい思い出の1ページをよすがに、今後もたびたび博物館を訪れる積極的な意欲を懐いてもらうならば、社会教育にも非常に貢献したと言えるのである。学芸員は各地をまわり、貴重な資料の発見収集につとめている。公共性の趣旨をご理解の上、門外不出の家宝の類の出品を、所蔵者が快諾してくださった場合には、感謝の念で胸が一杯になる。こうして集めた資料を活用し、テーマが十分に生かされる展示構成に苦心を重ねて仕上げて行く。「見せる人」のこうした蔭の苦労も、多くの観覧者から喜びの声なり、賞賛の言葉なりを掛けてもらうならば，すべての辛労も吹き飛んで、更に次の展示のための努力を黙々と続けて行くのである。

昭和51年度特別展ポスター

研究ノート

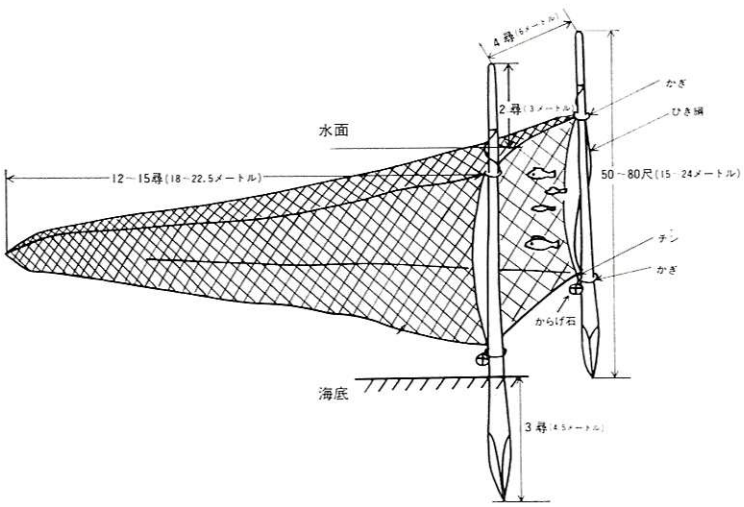
児島湾の樫木網漁

当館民俗部門では昭和51年3月19日から9月30日まで「樫木網漁」の関係資料を展示した。樫木網漁は児島湾で古くからおこなわれていたが、湾内の埋めたてが進むにつれてしだいにさびれていき、昭和23年、阿津村（現在、岡山市阿津）を最後に姿を消した漁法である。それは湾内の所定の場所に樫木（ならがし，ほんがしがよいとされた）を打ち込み、この樫木2本（間隔は4尋＝約6m）に網（三角形の袋網）1帖を，満ち潮時には口を湾口にむけ、引き潮時には湾内にむけて張り，潮流にのってくる魚類などを捕獲するもので、一潮ごと、潮がかわる前に網をあげて、逆方向にかけ換えた。（図参照）

近世の資料や聞き取り調査によると、この漁をおこなう権利は児島湾内の多くの漁村のうちでも阿津村、北浦村（現在、岡山市北浦）、八浜村（現在、玉野市八浜）の3カ村にしかなかった。児島湾内には3村固有のカシバ（樫木をたてる場所＝漁場）があり（樫木配置図・参照）そこは「株」として3カ村の特定の漁師たちに分有されていた。株を所持する漁師は大漁師とよばれた。彼らは網子とよばれる小漁師を雇用して、持株数分だけの網をかけ、漁業をおこなう網元であり、村内でも有力層を形成していた。

樫木は長さ50～80尺（15～24m）、太さは根元から1丈あがったところの周囲が手巾の6～7倍(1.2～1.5m)のものを使用した。この樫木は網元が津山、勝山などへ買いつけに出かけ、高瀬舟に積み、あるいは筏に組んで送らせたという。寿命は5～6年であった。樫木にかける網は、冬から春先に白魚をとる「白魚網」、3～5月頃にかける「えび網」、6～8月の夏漁に使用する「あらめ」、「なわみ」、「こぶくろ」、秋魚（盆～10月）につかう「えび網」、「ふくろ」など数種類がある。形はどの網も同じようであるが、網目の様子やおどしの部分に違いがある。展示したものは「こぶくろ」とよばれる網で、あらなみ（こませあみとよばれる体長5mmくらいのあみ）をとるのに使用したものである。樫木網の中では特殊なものに属し，普通のもの（たとえば、えび網は口の部分が12m×7mの長方形）にくらべ、口の部分が特別に小さく（2.3m×5.1m）、網目も口の部分から先まで均一である。

聞き取りによって阿津、北浦、八浜の樫木漁を比較してみると、その漁法にいくつかの相違点がみとめられる。八浜の樫木漁は「タテガシ」とよばれ、漁ごとに樫杭をうち、網をかけ、漁が終ると網をあげ、杭を抜いて持ち帰るというものであった。北浦、八浜では網の先に桐の「浮き」をつけたが、阿津ではこの「浮き」を使用した話を聞かない。阿津では網を沈めるためのおもしとして「からげ石」とよばれる石を使用するが、他の地域では使わないなど。これは湾内の潮流の速さの違い（湾奥の八浜、北浦ではゆるく、湾口に近い阿津では速い）によるもので、埋めたてが早くおこなわれた湾の奥から、古い漁業の形がすたれていったと考えられよう。



樫木網漁の図　阿津　伊丹英一、小磯昇氏のご教示による。

参考図書、岡山市史産業経済編

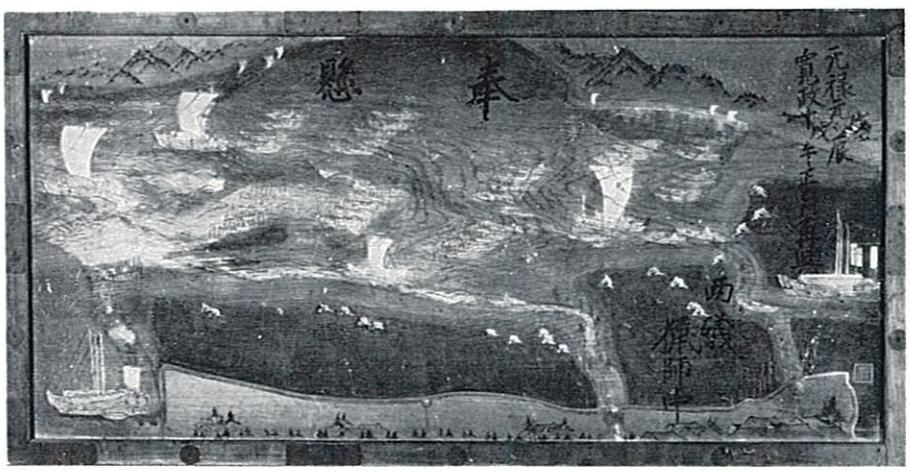
平安末期の歌人、西行が仁安ごろ（12C後半）讃岐の白峯に参詣する途中、備前国小嶋で詠んだ歌が彼の歌集「山家集」にあるが、その歌の詞書に「備前国に小嶋と申島に渡りたりけるに，糠蝦と申物、採る所は、おのおの別々占めて、長きさほに袋を付けて立て渡すなり（後略）」（傍点筆者）とみえる。

平安時代末頃児島ですでに樫木漁がおこなわれていたのであろうか。

近世にはこの漁業についての記録もかなり多くなる。そのなかで、岡山市妹尾の御前神社に伝えられる絵馬は注目されてよい。この絵馬には前景に潟板（磯板）を使った干潟

漁業が、そのうしろに、海中に丸太をたてておこなう漁業が描かれている。丸太の並び方が樫木漁とは違うように思われるが、他にこのような漁業は考えられないので、樫木漁ではないかと思われる。画図の右側に「元禄元戊辰、寛政十戊午正月両興、西磯猟師中」の文字がみえるが、その意味は不明である。（写真参照）

（竹林）



児島湾漁業図絵馬

岡山市妹尾

御前神社蔵

昭和51年度特別展

「近代科学をひらいた人々」

― 岡山の洋学者 ―

51，10，6 ～ 11．14

古川古松軒

古川古松軒は享保11(1726)年、備中下道郡新本村(岡田藩，現在総社市新本）に橋本護次の子として生まれた。通称を平次兵衛といい、諱を辰あるいは正辰と称した。古松軒はその号で、黄薇山人、竹亭とも号している。橋本家は代々薬種業を営む漢方医であったという。

その少年期、青年期については、今の段階では史料がみつからず、詳細はわからないが、歴史・地理への関心は若い頃から変らず、生涯各地を旅行し、数多くの紀行文や地図を書き残している。彼はその著作の中で、しばしば「百聞は一見に及ばず」と書いている。自分の目で見ることを重視し目にしたものには絶対の自信を持つ、これが古松軒の基本姿勢であったと言ってよい。またその記述全体を通じて言えることは興味の範囲がひろく、自然から人文全般にわたっていること、その記述の詳細なことである。

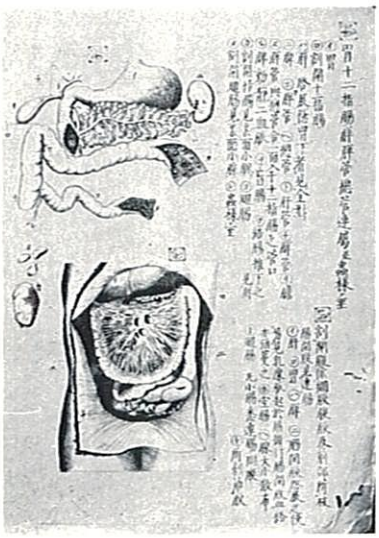
彼は60歳を過ぎてから、幕府に召され，一連の仕事をしているが、その時期が幕藩体制が内外共に危機に直面していた寛政期であったことは興味深い。更に彼が大黒屋光太夫――天明年間、カムチャツカに漂着し、寛政4（1792）年帰国――がロシアから持ち帰ったといわれる地図やロシア皇帝エカテリナ2世の肖像を写していることも興味深い事実である。（竹林）

ロシア皇帝エカテリナ2世肖像
画面上部に「伊勢ノ光太夫、磯七ガ持カヘリシ女主ノ図ノ写ナリ」とある

備作洋学者の群像

ここでは美作津山の宇田川・箕作両家の洋学、同じく美作住の久原甫雲、小林令助、仁木永祐、備前金川の大医難波抱節、児玉順蔵を紹介した。宇田川家ににについては、玄随・玄真・榕庵・興斉の4代にわたる家学に関する資料を展示した。大槻玄沢筆「槐園先生肖像」「同書簡」、玄真の「字韻集」、榕庵の「華韻集要」同草稿類、オランダカルタ等注目すべきものが多かった。箕作家については阮甫・省吾・秋坪の3人について関係資料を展示した。

久原甫雲については、延宝5（1677）年の「阿蘭陀流外科免許状」、小林令助については「杉田玄白書簡」が、いずれも注目すべき資料であった。また宇田川興斉・箕作阮甫に学んだ仁木永祐については、彼の使用した医療器具を展示した。幕末から明治初年にかけての医療器具は、全国的にもめずらしい。



宇田川玄真著　内象銅版図部分
文化5（1808）年

難波抱節の「胎産新書」の写本は、初公開のものである。彼が一生かかって集大成した産科学の全容がこの著によって明らかにされたといえよう。とくに紀州の華岡青洲との関係を示す資料は注目されてよい。

以上、備作の洋学者についての主たる資料を指摘したが、県下にはまだまだ掘り起されなければならない洋学者のいたことを附記しておく。（三好）

緒方洪庵

緒方洪庵は文化7（1810）年、備中国足守に生まれた。病弱で武士に適さないことを知り、医学を志して大阪・江戸・長崎で蘭学を修めた。天保9（1838）年、大阪で開業し、診療にあたるかたわら、適塾をひらいて多くの人材を育てた。さらに医書の翻訳，種痘の普及、コレラ対

洪　庵　の　生　家　跡
（県指定史跡）　岡山市足守

策などにも顕著な業績をのこした。文久2(1862)年、幕府の招きによって江戸へ赴き、奥医師兼医学所頭取となったが、激務のため病を発して翌3(1863)年、54歳で亡くなった。

洪庵は医を志す者に対して、患者の貴賤貧富を顧ずに病を治し，命を守るよう努めること、病人を名利の手段や研究の対象物と考えてはならぬことなどを説いた。

また、塾生の教育においては、自主的な学習により蘭書の読解力を錬磨させると共に、世界の動きや新しい生き方についても適切な助言を与えた。

適塾から近代日本の指導者が多数あらわれたのも偶然ではあるまい。 (前田)

テーマ展

寂厳展 ― その学問と書 ―

5. 11 ～ 7. 31

寂厳は元禄15(1702)年9月17日、備中足守藩士安富家に生れた。正徳2(1712)年、11歳で備中吉備津の普賢院で、僧超染(ちょうぜん)から戒を受け、享保2(1717)年、16歳の時、修学のため京都にのぼった。

享保5(1720)年、19歳の時、倉敷の円福寺に入り、悉曇(しったん)学を独学した。元文元(1736)年35歳の時，上洛中五智山の曇寂について本格的に悉曇学を学び大成した。なおこのころ法名法尒(ほうに)を寂厳と改めた。寛保元(1741)年、40歳の時，備中連島の宝島寺に入り、倉敷、岡山などで悉曇学を講義した。

明和4(1767)年、66歳で倉敷の玉泉寺に隠退した。明和8(1771)年8月3日、70歳で玉泉寺にて示寂。

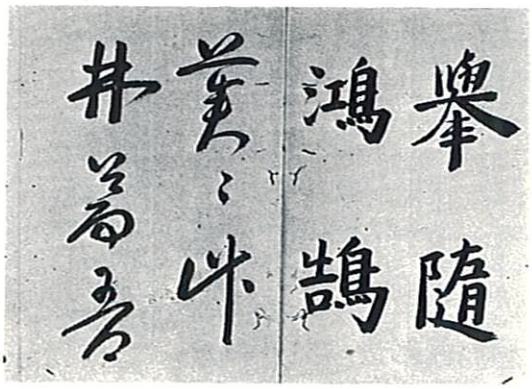
寂厳の書は早くから能書として注目されていたが、その奔放な書風は特に近年になって高く評価されるようになった。

本館では、彼の書や学問の基礎になった資料を展示し，寂厳の人間像の一端を紹介した。

本展示のため，未公開の資料を出陳くださった宝島寺、円福寺に感謝いたします。 (三好)

○ 出品目録

寂厳肖像 (宝島寺)
真言八祖画像讃 (円福寺)
飲中八仙歌巻子本 (宝島寺)
飲中八仙歌屏風 (宝島寺)
唐詩屏風 (館蔵)
唐詩屏風 (宝島寺)
隷書幅 (宝島寺)
書状 (宝島寺)
近水亭記 (宝島寺)
朝鮮使節に与える書 (宝島寺)
習字手本 (宝島寺)
梵唐阿弥陀経大観
梵漢助字合会
悉曇字母 (宝島寺)
梵文雑記 (宝島寺)
梵漢音韻考 (宝島寺)
法尒書状 (円福寺)



寂厳筆手習帖
宝暦3 (1753) 年

テーマ展

吉備津彦神社の文化財展

8. 3 ～ 9. 30

吉備津彦神社には古くから多数の文化財が保存され備前一宮の歴史と文化を物語っている。

昭和50年7月神社から、これら文化財を当分の間博物館へ寄託したい旨申し入れがあった。そのため当館では、これを機会に展示公開を行ない、資料を整理し、貴重な文化財の保護保存策を講ずることにした。

○ 神社の沿革

吉備津彦神社は岡山市一宮に鎮座し，主祭神は大吉備津彦命であるといわれる。

当社の創立の時期はよくわからない。平安時代の初めには既に中央政府や歴代の国司の尊敬をうけ、備前国第一の大社として重きをなした。

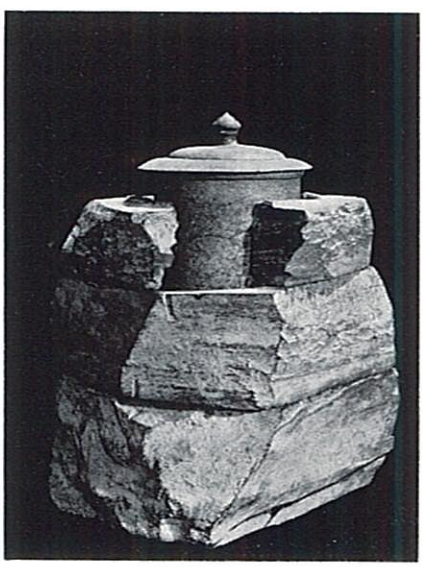
中世になると備前国の守護赤松、浦上氏及び小早川、宇喜多氏などから尊崇された。

江戸時代には、岡山城主池田家代々の崇敬をうけるようになり、特に延宝5(1677)年、輝武命(池田信輝の霊)と火星照命(池田輝政の霊)を本殿の相殿にまつることになった。そしてこの二神のために池田家から50石の社領が寄進され、以後池田家の祖廟としての性格を強くしていった。

今日、吉備津彦神社の夏祭りは、10数万の参拝者でにぎわう。神事絵巻に描かれたお田植祭が今なお古式ゆたかに行なわれ、そこに歴史と現代とのふれあいを見ることができる。 (竹林)

○ 出品目録

経筒、外容器(竜王山出土)	各1点	平安末期〜鎌倉前期
常行堂の瓦	3点	鎌倉前期
備前焼壷	1点	室町時代
鉄製釣燈籠	1点	安土桃山時代
門神頭部	2点	慶長12(1607)年
社殿造営棟札	1点	慶長6(1601)年
絵馬	6点	江戸時代
太刀(井上真改作)	1点	延宝5(1677)年
具足	1点	江戸時代
備前一宮神事絵巻	1点	室町時代
一宮社法	1点	康永元(1342)年
他に古文書	8点	



金銅製経筒および石製外容器

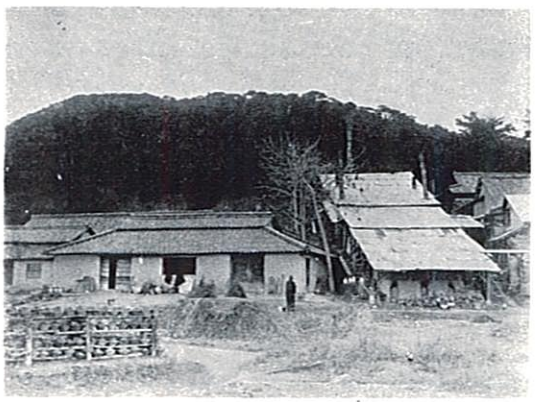
(岡山市一宮竜王山出土)
吉備津彦神社蔵

写真提供
山崎治雄氏

テーマ展

備中 酒津焼展

11. 19 〜 3. 13



甲山窯(大正時代)　写真提供 岡本素六氏

酒津焼は明治9(1876)年、岡本末吉が倉敷市酒津の高梁川西岸兜山(かぶと)の南麓に陶土を求めて開窯したことに始まる。

窯は12袋の大規模な登り窯で、「甲山窯」と「西山窯」がつくられた。一時は繁昌したが、長くは続かず、大正時代の末年、西山窯は閉鎖に追いこまれた。その原因は、交通の発達により大量生産による安価な陶磁器が出まわったためで、この時期には地方の民窯製品は一様に売れなくなったといわれている。これに対し酒津焼では、昭和の初期になって大原孫三郎を中心とする倉敷市文化協会、さつき会バザーなどで新しい陶芸作家の作品を紹介し、その刺激によって、酒津焼も徐々に民芸陶器として再生した。

今回の酒津焼展では、明治・大正時代の伊部、大原、萩などの陶工による様々な作品を展示し、酒津焼の多様性を示した。また昭和になって柳宗悦、浜田庄司、河井寛次郎らの民芸運動によって新風を吹きこまれた酒津焼も展示した。

これらの作品の中には伊部焼や高麗青磁の写し、また文人画家の往来を示す絵付作品、酒津の地元で育った岡本一族、小河原虎吉等の作品がある。 (浅原)

岡山県立博物館だより No. 9

発行日　昭和52年3月1日
発行者　岡山県立博物館
館長 安藤和昌
岡山市後楽園1－5
TEL (岡山) 72－1148